

インフォームド・コンセントを活かす

医療の現場には医療事故や紛争などリスクが高い。そうした医療訴訟に長年にわたって関わってきた弁護士の福崎博孝氏はインフォームド・コンセントの重要性を指摘する。医療者はどのように理解し、現場で活用したらよいか、増崎英明病院長が対談で探った。

患者が理解するプロセスが大事

増崎氏 インフォームド・コンセントという言葉は知っているけど、内容を理解している方は少ないのではないのでしょうか。昔、この言葉が社会の中で注目し始めたころ、福崎先生の講演を初めて聴き、「なるほど」と思いました。それまではインフォームド・コンセント派ではなく、どちらかというとパターンリズム派でしたから。

福崎氏 私は17年にわたって、患者や家族側に立った医療訴訟の弁護をした後、医療側の弁護を始め、今年でちょうど17年目を迎えます。両方の立場を理解しながらずっと思っていたことがあったんです。なぜ医療紛争になるのだろう、と。どう考えてもボタンの掛け違えにしか思えないものが多かった。経験を重ねていくうちに双方の意思の疎通が図られていないことに気づきました。

増崎氏 インフォームド・コンセントというと一般的に「説明」と「同意」と訳されます。この間のプロセスが一番のポイントです。つまり患者さん本人が「理解」して「選択」し、さらに「納得」して「同意」することです。ちゃんとプロセスを確認しながら、医師が説明したことを理解できたか、確認しながら進める重要性を福崎先生に最初に教えてもらいましたね。

福崎氏 インフォームド・コンセントとは、要するに医療側と患者側の会話です。医療の現場でミスがなくなることはありません。しかし不幸にしてミスがあったとしても、患者が納得してトラブルにならないケースも多くあります。今夏、増崎先生と共著で出版する『裁判例から学ぶインフォームド・コン

セント』という本の副題に『医療者と患者家族をつなぐ』と入れましたが、これは増崎先生の考案です。まさにその通りです。

増崎氏 インフォームド・コンセントという考え方は医療側に対して「もっとコミュニケーションを上手に取ってください」と患者側から出てきた課題だと受け止めています。これに対して、医療側はそれぞれの学会でガイドラインを作り上げ、患者側に答えを示しました。この2つを上手に使えば、そう大きな齟齬なしに医療側と患者が一定のコンセンサスに達することができると思います。

信頼関係づくりに看護師の役割

福崎氏 インフォームド・コンセントの際に重要な役割を果たすのが看護師です。医療の現場では医師よりも看護師の方が患者と接する時間は多いはずで、医師がどんなに言葉をくわいて説明しても限界があるので、そこを看護師さんがフォローできるかがポイントになります。また、医師、看護師という医療者のグループと患者側との信頼関係を看護師が高めていくという意識が重要になると思います。

増崎氏 患者さんたちは当然、看護師は医師側に付くと思っているはずで、そうではありません。むしろ患者さん側に立って、コミュニケーションのお手伝いをするのが看護師の役割です。説明が終わった後も患者さんと接する機会は看護師さんの方が圧倒的に多いので、そういう関係の中で治療法への理解を深めてもらうことを期待しています。

福崎氏 看護師、医師も含めて医療側のコミュニケーション能力が重要になりますね。いわゆる雑談能力ですね。医療人になる前の医学生と看護学生に



しっかりと身に付けてほしいですね。

増崎氏 産科では妊婦さんに「おめでとうございます」と伝えることは重要だと話しています。たとえ中絶することになったとしても、命を授かったわけです。しかし、それがなかなかできないようです。医学の基礎研究では人を相手にすることはほとんどありませんが、臨床の場合、相手は人間です。こういう言葉遣いでは相手がどう受け止めるだろうかと心を配ることは大切ですね。

福崎氏 法律相談でも同じですね。相談相手がどういう性格でどんな考えを持っているのか、読む力(推し量る力)、読もうとする力が必要です。法律論だけが頭にしっかり入っていても、これだけではいい結果を導きだせません。相手の考えを読む力は、インフォームド・コンセントの基本ではないでしょうか。

患者と医療側の双方を守る

福崎氏 長崎大学病院のインフォームド・コンセントのマニュアルは内容的にレベルが高く、今からの日本の医療界や法曹界が検討していく内容を既に記していることに驚きました。率直に言って、これは実現できるのだろうか、と心配になります。

増崎氏 かなり細かいところを記載していますね。

福崎氏 クリアするというより、こういう素晴らしいものがあるという意識を医療スタッフには持ってもらいたい。クレーマーとかモンスターペイ



シエントといわれる患者さんの多くは医療者が育てている可能性があります。しかも、その原因はインフォームド・コンセントにあると思えてなりません。

増崎氏 それは同感です。

福崎氏 秋から事故調査制度が始まりますが、インフォームド・コンセントをきちんと取っていないと、本来、事故調査制度にのせる必要がない事案まで扱うことになり、管理者側が苦勞することになりかねません。インフォームド・コンセントを得てカルテにきちんと残しておくことが医療機関として重要になるでしょう。

増崎氏 福崎先生はカルテに書いていないことはなかったことだとよく指摘されますね。現場の医師たちにはひと言でもメモを残しておく習慣を付けなさいと指導していますよ。

福崎氏 カルテへの記載を奨めるのは証拠になるからではありません。書いていないばかりに、本当は説明を受けていたのに聞いていないと勘違いすることが大いにあります。しかしそこに書いてあれば、聞いたことを思い出したり、そこで納得したりするのは。これは罪だと思いませんか？人間の意識をそういう風にしてしまうなんて。医療者の身を守ることに加えて、患者家族にとっても、余計な紛争へと発展しないことになるのです。

増崎氏 そうですね。福崎先生、本日はお忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。